

『玉勝間』卷八「ふるき物またそのかたを

いつはり作る事」並びに卷九「檜垣姫が事」考

——近世後期古典学に於ける随筆と註釈書——

膽 吹 覚

一、「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」

本居宣長の随筆集『玉勝間』卷八（寛政十一年（一七九九）刊）「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」には、次のように記されている。

ふるき物またそのかたをいつはり作る事

ちかきころは、いにしへをしのぶともがら、よにおほくして、何物にまれ、こだいの物としいへば、もてはやしめづるから、国々より、あるはふるきやしろ、

ふるき寺などに、つたはりきたる物、あるは土の中よりほりいでなど、八百年千とせに、久しくうづもれたりし物共も、つぎ／＼にあらはれ出来る類おほし、さてしかふるくめづらしきものの出来れば、その物はさらにもいはず、図をさへにうつして、つぎ／＼とほきさかひまでも、写しつたへて、もてあそぶを、又世には、あやしく偽する、をこものの有て、これはその国のその社に、をさまれる物ぞ、その国のなにがしの山より、ほり出たる、なにのかたぞなど、古き物をも図をも、つぎ／＼しくおのれ造りいでて、人をまどはすたぐひも、又多きは、いと／＼あぢきなく、心うきわ

ざ也、さいつころ、いにしへかひの国の酒折宮にして、倭建命の御歌の末をつぎたりし、火ともしの翁のかた、火揚命像としるしたる物を、かの酒折社の、屋根の板のはざまより、近き年出たる也とて、うつしたるを、人の見せたる、げに上代の人のしわざと見えて、其さまいみしくふるめきたれば、かの国に、その杜ちかき里に、弟子のあるが許へ、しかくのものえたるは、いかなるにかと、とひにやりたりしもしく、はやくいつはりにて、すなはちかのやしろの神主飯田氏にもとひしに、さらにかたもなき事也と、いひおこせたりき、又同じころ、檜垣姫が、みづからさぎみたる、ちひさき木の像の、肥後国の、わすれたり、何とかいふところより、ちかく掘出たる、うつしとて、こゝかしこに写したへて、ひろまりたる、これはた、出たる本を尋ぬるに、たしかなるやうにはきこゆれど、なほ心得ぬこと有て、うたがはしくなむ、すべてかやうのたぐひ、今はゆくりかにはうけがたきわざ也、心すべし、

近年、日本の古代上代に興味関心を抱く人々が増加した

ので、古代の物であれば、何でも持て榮やし、珍重する風潮がある。各地の古寺古社の伝来品や土中から発掘された遺物などが次々に報告され、その中には、そうした古代の物を模写した絵図の写しを得て玩ぶ人もいる。また、世の中には愚かな人がいて、古代の物やそれを描いた絵図の偽物を作つて、世間を騒がせる人もいる。宣長はこうした偽物作りを「いとくあぢきなく、心うきわざ也」と歎く。そして、宣長はこうした偽物の例として、甲斐国の酒折宮に伝わるという火揚命画像と、肥後国で出土した檜垣姫の木像を描いた檜垣姫図像の二つを挙げる。

火揚命は『古事記』の倭建命の東国征伐に登場する御火焼の老人のことである。倭建命は常陸国から甲斐国に入り、同国の酒折宮に逗留した。命がそこで火にあたりながら「新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」と歌うと、その火の番をしていた老人が即座に「日日並べて 夜には九夜日には十日」と歌った。命はこの老人を褒めて東国造の姓をお授けになったという。この場面は、『古事記伝』巻二十七に次のように記されている。

即自其國越出甲斐。坐酒折宮之時。歌曰。還
比婆理。都久波衰須疑弓。伊久用加泥都流。爾其御火

焼之老人統御歌以歌曰。迦賀那倍弓。用邇波許許能用。
比邇波登袁加袁。是以譽其老人。即給東國造也。

『玉勝間』によると、この御火焼の老人を描いた火揚命画像が、酒折宮の屋根の間から出てきたという。宣長がその火揚命画像の写しを見たところ、上代の人が描いたようにも見たので、甲斐国に住む鈴屋門人の萩原元克に問い合わせた。すると、元克からそれは偽物であるとの回答を得た。そして、宣長は萩原とは別に、酒折宮の神主にして鈴屋門人の飯田大蔵にも同様の問い合わせたところ、大蔵からも同じく偽物であるとの返答を得た、と『玉勝間』には記されている。

この火揚命画像の騒ぎがあったのと同じ頃、肥後国で檜垣姫自作の木像が発掘され、その木像を描いた絵図の写しがあちこちに出回っているという情報が宣長のもとに届く。檜垣姫は、平安時代中期の伝説的歌人で、『後撰和歌集』第十七巻雑三に、次の一首を詠んだことで知られる人である。

つくしのしらかはといふ所にすみ侍りけるに、
大式藤原興範朝臣まかりわたるついでに、水た

へんとてうちよりてこひ侍りければ、水をもて
いで、よみ侍りける ひがきの姫
年ふれはわか黒髪もしらかはのみつはくむまで老にけ
るかな

かしこに名たかくことこのむ女になん侍りける^{〔1〕}
檜垣姫はこれ以外にも『大和物語』にも登場し、またこの姫の名を冠する家集に『檜垣姫集』がある。檜垣姫は、平安時代中期の伝説的な歌人としてよく知られた人物であった。宣長はしかし、その檜垣姫像並びに同画像にはなお疑わしき点があるとの所見を記している。そして、彼はこの随筆の結びとして、いずれにせよ火揚命画像や檜垣姫画像のようなものは十分に注意して臨む必要があると注意を喚起している。

二、「檜垣姫が事」

肥後国で檜垣姫自作の木像が発見されたという情報は、『玉勝間』巻八が刊行された寛政十一年（一七九九）の四年前、寛政七年（一七九五）に出版された橘南谿『西遊記』

に、次のように報告されている。

檜垣ノ女

天明癸卯の春、肥後国岩戸の観音の巖窟の中に、或人、願の事有りて五百羅漢を石もて彫刻て安置せしに、其事やうゝ成就して、猶、窟の額にも安置せばやと人々はかりしかど、たやすくもいたり通ふべき所ならねば石工をふごといふものに入れて、縄もて山の峯より釣下して、辛うじて其額にいたり、ゑりうがちたりしに、一所やはらかなりしかばくわしく見るに、石の筐壺ツを埋たり。取出して、人々集り開き見るに、内に又一重の石筐あり。其蓋に「檜垣ノ女ノ形ノ自作」といふ六字を彫付たり。蓋をひらけば小き像を入れたり。像は陶器のやうにも見ゆ。わたくしにはからふべきにあらずとて、熊本の官府にもて出づ。すなわち時習館に下し給ふ。館の学士打集りて其事を記録し、且其像を模写し、石にゑり、紙に写し、そここ、もてはやしぬ。其頃、予も熊本にありしかば、村井椿寿、藪茂次郎などといへる人々より此物語を聞侍りしかば、其図をこひ得て、都のつとはなしぬ。

此檜垣の女は其名高くして諸書に見えたり。後撰集

十七卷に、筑紫の白川といふ所に住侍りけるに、大式藤原興範朝臣のまかりわたるついでに、水たべんとて打よりて乞ければ、水をもて出てよみ侍りける。

年ふれば我黒髪も白川のみづはくむまで老にけるかな

又、扶桑拾葉集第二卷に、檜垣が家の集を載たり。また、大和物語に、純友が討手の使に大式小野好古下りて、檜垣の女が家のありしわたりを尋て、いみじうあわれがれりと見えたり。又、謡本にも、むかし筑前の大宰府に檜垣の庵しつらいて住し白拍子、後におとろへて此白川のほとりに住しなりと見えたり。檜垣の女はまことに賤しき白拍子なりしかど、風雅に長じ、一世に名を施し、猶千秋の後を期して、かく人跡絶たる所に、我像をみづから造りて籠置る事、丈夫にもおさくおとらざる志なりけり。興範、好古の何くれなど、其故なきにしもあらず。

南谿の『西遊記』によると、天明三年（二七八三）、肥後国の岩戸観音の裏山の岩壁から石の箱一つが掘り出された。その箱の中にはまた石の箱があり、その蓋に「檜垣ノ

女ノ形ノ自作」の六文字が刻まれていた。そして、その箱の中には小さな像が入っていたという。発見された石箱と像は熊本藩藩校、時習館に送られた。そして、そこで時習館の教授などによって検討され、その像の模写に文章が添えられた刷り物が作られて、あちこちで話題になっていたという。南谿はその頃、ちょうど熊本に滞在していたので、

村井琴山や藪孤山などからその情報を得て、その図の写しを求め得て、それを京都への土産としたと記されている。後に南谿はこの時に京都へ持ち帰った檜垣姫圖像を知人に披露している。そのことは南谿の『北窓瑣談』巻一（文政十二年刊）に、「隠居の上人に、檜垣の女の図見せたりしに、今より千余年前つかたは、衣紋ことやうにて、ゑりといふもなく袖長く、後の方へかへり」と、物知れる人に聞

しが、此図こそ、其詞のごとくなりと言られき。」とあることから知られるところである。南谿は肥後で檜垣姫圖像の写しを得て、それを「都のつと」として京都へ持ち帰り、彼の知人（「隠居の上人」）に見せた。そこに南谿の好事家的な好奇心を看取ることができるのではないだろうか。勿論、南谿は医師として、また文人としてその名を知られた人であるから、そこに学究的要素がまったく無かったとは

言わない。ただ、『西遊記』と『北窓瑣談』に見られる檜垣姫圖像を巡る南谿の一連の言動には、多分に好事家的好奇心が看取されるのである。

南谿が肥後国で檜垣姫圖像の写しを入手した天明三年（一七八三）から数えて二年後の同五年（一七八五）の冬、名古屋の鈴屋門人、渡辺直麿が檜垣姫圖像を写した刷り物を持参して、松坂の宣長宅を訪れている。檜垣姫画像の写しは京都のみならず、尾張にも広がっていたのである。宣長は直麿が持参したその圖像を見し、直麿に次の一首を詠んで与えている。『石上稿』巻十五からその歌を引用する。

檜垣姫かみつから作れるかたとて、ちかきとし、
肥後国の岩戸山といふ所より堀得たるをうつせ
る形とてかけるに、渡邊直まろか歌こひければ、
流れての世にしのへとや白川のみつからかゝる影はうつせし

宣長のこの一首については、白石良夫氏が「この歌をもらった直麿がどう反応したか、今となっては知るすべもない。もし直麿が喜んで帰っていったとしたら、それは、この歌にこめた師宣長の訓戒をまったく理解できていないと

いふべきである。つまり、「しのべとや」の「や」は疑問ないし反語であつて、千年後に私を偲べというんでこんな像を自分で作つたのだらうか、そんな馬鹿な、というのが歌の意である。(中略) つまり、宣長もこの考古学的遺物の写しを見て戯れたのである。戯れた歌に託して弟子に、こんなものに簡単にひっかかつてはいけない、と教諭したのである。⁽¹⁾と述べておられる通りであらう。宣長の歌から判断するならば、直麿から檜垣姫画像を見せられた時、宣長は、それは偽物であらうと考えていたようである。ゆえに『玉勝間』巻八「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」においても、「これはた、出たる本を尋ぬるに、たしかなるやうにはきこゆれど、なほ心得ぬこと有て、うたがはしくなむ」と慎重な姿勢を示したのであらう。

鈴屋門人である直麿が檜垣姫画像の写しを持参して、その絵に宣長の和歌を所望したことは、宣長にとって忌々しき事態であつた。そのことは、宣長が直麿に詠んで与えた前掲の和歌一首から知られるところである。宣長は勿論、京都で橘南谿が彼の知人(隠居の上人)に檜垣姫画像の写しを見せたことは知らなかったはずであるが、「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」(巻八)に「うつしと

て、こゝかしこに写しつたへて、ひろまりたる」と記されていることから、肥後国で作られた檜垣姫画像の写しが、当時の文人たちの間に流布していたことは、宣長の知るところであつたようである。こうした檜垣姫画像の写しをめぐる直麿や南谿などの文人たちの言動には勿論、学究的な面もあつたであらうが、宣長はそこに学究的な好奇心よりも寧ろ好事家的なそれを看取したのではなかつたらうか。宣長は一人の学者として、当時の檜垣姫画像をめぐる好事家的な風潮に警鐘を鳴らす必要性を感じたのではなかつたらうか。

そこで宣長は『玉勝間』巻九「檜垣姫が事」で、再び檜垣姫像の問題を取り上げる。「檜垣姫が事」には、次のように記されている。

檜垣姫が事

さきに萩の下葉の巻にいへる、ひがきのおうなが像といふ物の事、肥後国人にとひしに、語りけるは、かの国飽田郡白川のあたり、九品山蓮台寺といふ寺に、かの姫の墓といふ有て、古き石塔たてり、きざめるもじはなし、かの像といふ物は、同郡に岩殿山といふに、観音をすゑたる岩屋のある、そのいは屋のひたひより、

ほり出たりといへり、此所は、かの姫の深く信じて、つねにまうでしところ也といひつたへて、そのあたりに、山下庵とて、まうづるたびごとに、立よりし所なりといふ寺もあり、又くみてかの仏にたむけし水とて、井もある也、されどかのほり出たりといふ像は、まことにいつはれる物なるべしと語りき、

宣長は右の随筆で「ひがきのおうなが像といふ物の事、肥後国人にとひしに」と記すのみで、その実名を挙げていない。鈴屋門人で肥後国の人と言え、まず長瀬真幸が思ひ出される。そこで宣長と真幸との間で交わされた書状を調べてみると、寛政十二年（一八〇〇）二月廿七日付の宣長から長瀬真幸への書状に「檜垣姫像石すり御恵、忝奉存候」と見える。『玉勝間』巻九が刊行されたのが寛政十一年（一七九九）であるから、この書状はあくまで真幸が宣長に檜垣姫像の刷り物を贈ったということを示すものであって、宣長が檜垣姫像について真幸に問い合わせたことを意味するものではない。しかし、この書状は宣長と真幸の間で、出土された檜垣姫像に関する何らかの情報交換があったことを推測させるものである。ゆえに「肥後国人」は長

瀬真幸ではなかったかと私は推測している。

「檜垣姫が事」に記された「肥後国人」の報告は、およそ次のような内容であった。肥後国飽田郡白川近くの九品山蓮台寺に、檜垣姫の墓と呼ばれるものがある。その墓には古い石塔が建てられているが、文字は刻まれていないという。檜垣姫像は、同郡の岩殿山に観音像を祀った岩屋があり、その岩屋の岸壁から掘り出されたという。この場所は檜垣姫が深く信じて、常に参詣した所と言い伝えられており、その近くに姫が参詣の度に立ち寄ったという山下庵という寺もある。また、姫が仏前に手向けるために水を汲んだと伝える井戸もある。こうした伝承遺跡はあるが、しかし、先ごろ掘り出されたという檜垣姫像は偽物であろう、と「肥後国人」は語ったという。宣長はこの掌編の末尾を「と語りき」とし、「肥後国人」からの報告のみを紹介し、彼自身の所見は記していない。檜垣姫像に関する宣長の所見は、すでに「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」（巻八）で述べられている。ゆえに、宣長は「檜垣姫が事」（巻九）では、第三者すなわち、檜垣姫像が発掘された肥後国の人からの報告を掲載することで、「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」（巻八）で述べた自説を補強す

る狙いがあったのであろう。

宣長は肥後で発掘された檜垣姫像について、『玉勝間』の「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」(巻八)と「檜垣姫が事」(巻九)で取り上げている。今、その背景を考えてみると、それはまず、彼の檜垣姫に対する興味関心が考えられてよいであろう。彼のそれは『後撰集』『大和物語』などから連想される文学的なものであったはずである。また、その一方で、宣長は、檜垣姫画像の写しをめぐる渡辺直麿や橘南谿などの当時の文人たちの言動に好事家的な好奇心を看取し、一人の学者として、そうした風潮に警鐘を鳴らす必要性を感じたのではなかったろうか。こうした二つの背景があつて、宣長は『玉勝間』で出土した檜垣姫像を取り上げたのではなかったろうか。

三、近世随筆に見る檜垣姫像

肥後国で発掘されたという檜垣姫像は、宣長の『玉勝間』、橘南谿の『西遊記』『北窓瑣談』で取り上げられたことは、先に述べた通りである。この他にも、江戸の大田南畝が『二話一言』巻二に、次のように記している。

檜垣女像

天明二年の頃、肥後熊本檜垣寺より一つの石槨を掘出せり、檜垣女のをきつき所にや。槨中に古代なる女の像あり。背に檜垣女自作像とありて、円き印に万古登といへる三文字ありとぞ。靈巖洞といへるも其わたり也、岩戸の観音立せ給ふ。靈巖洞といへる三文字を巖にゑりたり。宋人の書なりと、熊本侯の医者樋口元良かたりき。⁵⁾

南谿の『西遊記』は檜垣姫像の発掘を天明三年(一七八三)と記していたが、南畝は、それは天明二年(一七八二)であったと記している。南畝の檜垣姫像に関する見解については、白石良夫氏が「『万古登』はすなわち「真(まこと)」で、古いものを無邪気によるこぶ尚古趣味の俗物に、これもまたかれらがよろこびそうな真仮名表記(万葉仮名)でもって、そんなの真つ赤な偽物にきまっているじゃないか、と揶揄したのであった。」と指摘されている通りであろう。南畝一流の表現であるが、その立場は宣長が『玉勝間』で述べたところと同じである。

南畝と同じく江戸の人で、考証学を能くした人として知

られる山崎美成も、『海録』巻二に、次のように書き留めている。

檜垣女

檜垣女は、古への遊女にして、歌の道に殊にその名高し、後撰集卷十七雜三四右にも、よめる歌を載せらる、又大和物語抄三の五十一右にも見えたり、歌集一卷あり、類從卷第二百七十二に収たり、天明壬寅四月八日、肥後州岩戸山靈巖洞上の土中より、壺一つほりいでたり、その中に土偶の像ありて、壺に檜垣女形自作といふ文字ありといひ傳ふるを、左に載す、(図は省略、膽吹注) 檜垣女偶、高二寸一分、色紫黒、如磁器、壺口徑二寸五分、腹四寸、底三寸三分、蓋徑二寸四分、以響胴造之^⑥、

美成も南畝と同じく、肥後国で檜垣姫像が発掘されたのは天明二年(一七八二)とする。美成はしかし、寛政八年(一七九六)に生まれた人であるから、檜垣姫像発掘時には未だ生まれていなかった。美成の『海録』は文政三年(一八二〇)から天保八年(一八三七)にかけて記述されたものと推定されている。すなわち、宣長・南谿・南畝の

三人は、檜垣姫像が発掘された当時に、その情報を得て、それを随筆に書き留めたが、美成はその発掘から約四十年後にその随筆に書き留めているのである。なお、美成は『海録』で檜垣姫像の真贋には言及していないので、彼の判断は不明である。

天明期に肥後国で出土した檜垣姫像の真贋について、宣長と南畝は偽物であると見ていたが、熊本藩藩士で国学者の中島広足は、それは本物であると考えていた。広足は寛政四年(一七九二)の生まれであるから、彼も美成と同じく、檜垣姫像出土以後に生まれた人である。また、広足は国学を長瀬真幸に学んだ人であるから、鈴屋系の国学者といてよいだろう。広足には『檜垣姫集』を研究した『檜垣姫家集補註』(文政七年(一八二四)成)があり、その上巻「総論」に、次のように述べている。

広足按に、此像の事、はやく、玉かつまにも、「或人のいへること」とて、しるされて、又後に、そは偽物なるよしの、説を挙げられたれど、其ありしやうは、右のごとくにて、さらに、いつはりにあらず。(其事に、あづかりし、村木某、くはしく、おのれに、ものがたれり) 自作とあるは、いとくおぼつかないけれど、

其さま、いとふるく、(蓋などのさまことにふるし)近世人の、たくみの、及ぶべきに、あらず。

かれ按に、此像は、檜垣姫の、死してのち、あひしれる、人などの、作りおきたりけんを、又、後の人の、壺など物して、さる所には、上おきたるにや、あらむ。みづからはさばかり、信じけん観音の、窟の額に、吾像を、あげおくべき、ものとも、おぼえず。そは、とまれかくまれ、めづらかなる、ものになん。^①

広足は出土した像は、姫の死後、彼女の知人が製作し、更にその後の人がその像を壺に入れて、岸壁に埋めたのではないかと推測している。広足はまた、『檀園隨筆』下巻「檜垣姫家集補註にいひもらし、事とも、ひかきの塔の事」(嘉永七年(一八五四)刊)で、宣長の『玉勝間』巻八「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」の檜垣姫に関する文章を引用した後に、次のように述べている。

広足云、今松尾山の坂みちに、こうぶし坂といふあり。土人の説に、こはもとこぼし坂といひしを訛れるにて、檜垣か岩殿山の観音にたむくる、白川の水をもてかよふとて、此坂みちになつみて、こぼしたりしよ

り名におへり、といひ伝へたり。されど檜垣かくみてつねにたむけゝむ水は、玉勝間にもいはれたる如く山下庵なる井の水にて、白川の水にはあるべからず。山下庵は、靈巖寺にいと近くて、庭に今もいと清らかなる水わき出めり。此土人の説は、かのみつはくむまでの歌よりおもひよりて、しかいひなし、ものなるべし。或云。此像を入たる壺に彫附たる、檜垣女自作、とある六字にて、はやく偽物なる事はいぢるし。そはみづから物したらむには、たゞ檜垣とこそかゝめ、女ノ字あるは、みづから造らざる証ぞかし。斯いはゞ、又器はあたし人の物しけんといふべし。されど、かく呼名の下に女ノ字をかく事は、むげに近世の習にて、そのかみ、かゝるまぎらはしき書ざまはものに見えず、是みづから作らざる証とすべきもの也。(割注)広足云、呼名の下に女字をそふる事、いにしへにもありて其よしはおのれ白女考に委しくいへり。

又云。檜垣女とあるは、まぎらはしきことながら、まづかくかけると、真図のいとをさなげなるによりて、いとをかしき考あり。そはもし姫に一人のむすめありて、はやくうせにしか、手まさぐりに造りおきけむ涙

のたねの、形見やうの物にはあらざるか。かなしくものせし子ゆゑには、かしこきあたり〔割注〕観音の岩屋のひたひ。をもはばかりで、納めもしつべし。さてさるかたにひかれて、観音をも信じけむはかりかたし。此三字正しくよめば、ひがきがむすめ、とよまれば也。此考かならずしもよしとはあらず、さくじりなるえせことなるべけれど、ふとおもひよりつるまゝに記せるなり。〔割注〕広足云、此むすめの説は、げにもさくじりことゝと見ゆれど、をかしき方もあれば記しおきぬ。

右の文章で広足は、或る人が、檜垣姫像が入っていた壺に刻まれていた「檜垣女自作」の中の「女」の字について、近世の人の書き方であり、それがこの像が偽物である証拠であると述べているが、彼は、それは間違いであり、呼名の下に「女」の字を添えることは上代にもあったと反論する。また、広足は興味ある推論として、檜垣姫に一人の娘があつて、その娘が夭折したので、姫はその形見にその娘を模った像を作り、観音の岩屋に納めたではないか、と説を紹介している。

この他に、青柳種信が檜垣姫について考証した『檜垣姫乃考』（文政元年十一月成、松浦史料博物館所蔵）と題する一冊の写本がある。種信は福岡藩士で、本居宣長に師事して国学を学んだ人である。『檜垣姫乃考』はわずか六丁の掌編であるが、種信は『後撰集』『大和物語』『檜垣姫集』を引用して、檜垣姫の伝記を考証しており、それは一編の考証随筆と見てよいだろう。その末尾に「肥後熊本の下西二里ばかりに、今も山下庵といふ所あるよし俗謡に見えたり。天命中、こゝより檜垣姫が自作の像の出たるといふは、後にきけば浮たる言にて、近きころさかしらに作れるよし聞えたれども、そこはかの姫が古跡なりし事は疑ひなきよしなり。」^⑧と言ひ添えられている。種信は出土した姫像は近年の製作であると言われているが、山下庵が檜垣姫の古跡であることに疑ひはないと記している。出土した姫像を偽物と見る立場は、種信の師、宣長の『玉勝間』の記すところと同じである。

このように見てくると、天明年間に肥後国で発掘された檜垣姫像が、橘南谿『西遊記』『北窓瑣談』をはじめ、本居宣長の『玉勝間』、大田南畝『一話一言』、山崎美成『海録』、青柳種信『檜垣姫乃考』、中島広足『檀園随筆』など、

その発掘から約七十年に渡って、近世隨筆の中で繰り返して取り上げられてきたことが知られるのである。

四、発掘された檜垣姫像と近世の註釈書

それでは檜垣姫が登場する文学作品、すなわち『後撰和歌集』『大和物語』『檜垣姫集』の三点の註釈書——檜垣姫像が発掘された天保年間以降に成立したもの——に於いて、発掘された檜垣姫像をめぐる問題は、どのように扱われているのであろうか。まずは『後撰和歌集』の註釈書から見ていこう。宣長の『後撰集詞のつかね緒』（享和元年秋成稿、享和二年刊）は、檜垣姫の「としふれば」の一首について、次のように記している。

つくしの白川といふ所に住侍けるに、まへより
大式藤原興範朝臣のまかりわたるついでに、水
たべむとて、うちよりてこひ侍ければ、水をも
ていでて、よみ侍ける、
ひかきの姫
年ふれはわか黒髪もしら川のみつはくむまで老いける
かな

此詞書、まへよりといふ言なき本は誤也、ま

へよりまかりわたるとは、俗にまへをとほるといふこと也、

宣長は、その詞書の「まへより」という言葉がない本は誤りであり、「まへよりまかりわたる」というのは俗に前を通るといふ意味であるとの註釈を施しているが、発掘された檜垣姫像については、『玉勝間』で二度も取り上げているにも関わらず、ここではまったく言及されていない。また、岸本由豆流『後撰和歌集標註』（文化十年成稿）も発掘された檜垣姫像に関する言及はない¹⁰。

次に、天明年間以降に成立した『大和物語』の註釈書を見てみよう。文政年間に成立したとされる高橋残夢『大和物語管窺抄』（文政年間成立）には、次のように記されている。

つくしに有けるひかきのこといへるは、いとらうあり
おかしくて世をへけるものになむ有ける、としつきか
くてありわたりけるを、すみともかさわきにあひて、
いゑもやけほろひ物のくもみなとられはてゝいといみ
しうなりにけり

「檜垣のこ、後撰作者筑前の遊女成しとそらうは」

かゝりともしらて野大貳うての使にくたり給て、それか家の有しわたりを尋ねて、ひかきのこといひけむ人にいかてあはむいつくにかすむらむとの給へは、此わたりにすみ侍しなともなる人もいひけり、哀かゝるさわきにいかに成にけむ尋ねてしかなどの給ひけるほとに、かしらしろきをうなの水くめるなむまへよりあやしきやうなる家に入る、ある人有てこれなむひかきのこといひけり、哀かり給ふてよはすれとはちてこて、かくなむいひける

「まへよりあやしきやうなる家に大貳のまへよりなりやうなるはさまなるにてたゞ賤しき箇などをいふなり」

うは玉のわかくろかみはしら川のみつわくむまで成にけるかな

「後撰雜三、つくしのしら川といふ所に住侍けるに、大貳藤原興範朝臣のまかりわたるついでに水たへむとて、うちよりこひ侍ければ、水をもていて、よみ侍ける、ひかきの姫、初句年ふれはわか黒かみも、結句老にけるかな、かしこに名たかくことこのむ女になむ侍けると有、こはとしふりたれは黒髪もみつ

『玉勝間』卷八「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」並びに卷九「檜垣姫が事」考

はくみに成まてに老にけりといふまでの意成へし、白川は髪白くなれるにかけ、下のみつといふに続けたるにて、みつはくみといふか、則其比有し髪形の名なるへし、左右の膝かしらとおとかひの一所へよるをみつわすといへれと、おほつかなし、後撰の詞書いとくたゞし、さて此野大貳とこゝに有は、上にいへる好古をいふならめと此詞書にては藤氏なり、猶考へし、白川は肥後国阿蘇山より出る川也」

とよみたりければ、哀かりてきたりける、あこめひとかさねぬきてなむやりける

「あこめ」¹¹⁾

『大和物語管窺抄』は語釈や歌の解釈を示すのみで、出土した檜垣姫像については触れていない。また、『管窺抄』とはほぼ同時期に成立したとされる前田夏蔭『大和物語纂註』(文政二年八月成)も檜垣姫像に関する言及は見られない。¹²⁾最後に『檜垣姫集』であるが、これは前章で述べた通り、中島広足『檜垣姫家集補註』上巻「総論」において、出土した檜垣姫像に関する広足の見解が述べられている。そこ

で広足は、姫の死後、彼女の知人が製作し、更にその後の人がその像を壺に入れて、岸壁に埋めたのではないかと推測を記している。

このように見て来ると、天明年間に肥後国で出土した檜垣姫像について、『後撰和歌集』『大和物語』『檜垣姫集』に関する近世の註釈書では『檜垣姫家集補註』のみがそれを取り上げており、それ以外の『後撰集詞のつかね緒』『後撰和歌集標註』『大和物語纂註』『大和物語管窺抄』では、この問題について全く触れられていないことが確認できた。

『玉勝間』に拠ると、宣長は出土した檜垣姫像を偽物と見ていたことが知られるが、由豆流、夏蔭、残夢の三名の、この姫像に関する見解は知ることはできない。もし由豆流、夏蔭、残夢も宣長と同じく、この像を偽物と見ていたならば、彼らが出土した檜垣姫像の問題を各自の註釈書で取り上げなかった理由は、出土した檜垣姫像が明らかな偽物であり、己が註釈書では取り上げるべきではないと判断したからであろう。これに対して広足は、出土した檜垣姫像は近世に製作されたものではなく、姫の死後に作られた可能性を指摘していた。ゆえに、広足は『檜垣姫家集補註』で

出土した姫像を取り上げて詳しく考証したのであろう。すなわち、出土した檜垣姫像を本物と見るか偽物と見るかによって、この問題を註釈書に取り上げるか否かが分かれたのではないかと推測されるのである。

しかし、たとえ出土した檜垣姫像を偽物と判断したとしても、彼らがこの問題について、各自の註釈書に付言すらしなかったことは、注目してよいのではないだろうか。宣長、由豆流、夏蔭、残夢の四名は『後撰集』や『大和物語』の註釈書を書くほどの人であるから、そこに登場する檜垣姫に文学的な興味関心を抱いていたはずであり、肥後国で出土された檜垣姫像に対して、程度の差こそあれ、それぞれが興味関心を寄せていたはずである。それにも関わらず、彼らは各自の註釈書に於いて、出土された姫像について学問的に論じる——この場合は否定する——ことなく、また出土した姫像についての簡単なコメントすら残さなかった。つまり、宣長、由豆流、夏蔭、残夢は出土した檜垣姫像に関する情報を得ていたと推測されるが、各自の註釈書では意識的にこの問題に触れなかったのではなかったろうか、ということが考えられるのである。

結び

近世後期の天明年間、肥後国で檜垣姫像が発掘された。この話題は橘南谿『西遊記』で早くも報じられ、その後、本居宣長『玉勝間』、大田南畝『一話一言』、南谿『北窓瑣談』、山崎美成『海録』、中島広足『樞園随筆』といった近世随筆で次々と取り上げられた。その一方で、宣長『後撰集詞のつかね緒』、岸本由豆腐『後撰和歌集標註』、前田夏蔭『大和物語纂註』、高橋残夢『大和物語管窺抄』では、この檜垣姫像について全く触れられることはなかった。発掘された檜垣姫像をめぐる、近世随筆と近世の古典註釈書は対照的な対応を見せたのである。この結果から見ると、天明年間に肥後国で発掘された檜垣姫像をめぐる問題は、古典の註釈書で取り上げるべき事柄ではなく、随筆で取り扱うべき話題であった、ということが言えるであろう。宣長が、檜垣姫像をめぐる問題について『後撰集詞のつかね緒』では一言も触れずに『玉勝間』で述べたことも、近世後期の古典学者が持っていた、こうした書き分けの意識の表れと見てよいのではないだろうか。

本稿では『玉勝間』収録の二編の随筆（「ふるき物またそのかたをいつはり作る事」と「檜垣姫が事」）の考察を通して、近世後期の古典学に於いては、註釈書にかくべき事柄と随筆に書くべき話題が区別されていたのではなかったか、という可能性を提起した。この可能性を仮説とするには更なる考察が必要であるが、それは今後の課題とさせていただきます。

註

- (1) 国文学研究資料館「二十一代集データベース」使用。
- (2) 宗政五十緒校注『西遊記』一七九～一八〇頁、新日本古典文学大系九八、岩波書店、一九九七年刊。
- (3) 『日本随筆大成』第二期第十五卷一七六～七頁、吉川弘文館、昭和四十九年刊。
- (4) 白石良夫『玉勝間』——古代研究の余瀝——、『国文学解釈と鑑賞』七五六号、平成六年五月刊。
- (5) 『日本随筆大成』別巻第一卷九八頁、吉川弘文館、昭和五十三年刊。
- (6) 山崎美成『海録』、国書刊行会、大正四年刊、二六九頁。
- (7) 『中島広足全集』第二卷五一五頁、大岡山書店、昭和八年刊。

(8) 『日本隨筆大成』第一期第三卷二八八―二八九頁、吉川弘文館、昭和五十年刊。

(9) 平林文雄「檜垣姫乃考(翻刻)」——松浦史料博物館蔵著者自筆本について——、『平安文学研究』四十九号、昭和四十七年十二月刊。

(10) 岸本由豆流『後撰和歌集標註』第四冊(文化十年成稿)には、次のようにある。

つくしのしら川といふ所にすミ侍りけるに、大式藤原興範朝臣のまかりわたるついで、水たべんとてうちよみてこひ侍りければ、水もていでゝよみ侍りける、
大和物語ぬまたまのば
 としふればわが黒髪もしら川のみづはくむまでおひに
 おいはふしのかもし 家集 ひがきの姫

かしこに名たかくこともむ女になん侍りける

〔頭注〕大和物語云、つくしに有けるひがきのごといひけるハ、いとらうありをかしくて、よをへたるものになんはへる、としつきかくてありわたりけるを、すみともがさわぎにあひて家もやけほろび、物のぐもみなとられはてゝ、いといミじうなりにけり、かゝりこともしらで、野大弐うての使にくたり給ひて、それが家のありしわたりをたづねて、ひかきのごといひけん人にいかであはん、いつくにかすむらんとしたまへハ、

このわたりになんすみ侍しなと、ともなる人もいひけり云々、かしらしろきおうなの水くめるなんまへよりあやしきやうなる家にいりける、ある人有て、これなんひかきのごといひけり、あはれかり給うて、よばすれど、はぢてこで、かくなんいへりける、ぬば玉のわがくろかみも云々、

日本今昔物語第十二

美豆波左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美久良介乃保祈爾阿布曾宇礼志岐 又出家 華驗記続往生傳

源氏夕顔云、これミつが父の朝臣のめものにはべりしものゝミづはくむまで云々の事ハ附録とてもらしつ

枕草子六、事なし草ハ思ふことなきにやあらんと思ふもをかし(刈谷市立刈谷図書館村上文庫所蔵本、第四冊十六丁表)

(11) 『未刊国文古註釈大系』第九冊四二五―四二六頁、帝国教育会出版部、昭和十三年刊。

(12) 『大和物語纂註』の檜垣姫の段は、次のように註釈されている。

つくしにありける。ひかきのごといひけるは。いとらうあり。をかしくて。世をへける物になむ有ける。年月かくてありわたりけるを。純友かさわぎにあひて。家もやけほろび。物のぐもみなとられはてゝ。いとい

みしう成にけり。

抄云。ひかきのご筑前の遊女成しとぞ。としつきかくて。をかしく勞ありて世をへし事也。物のぐは道具供也。いみしうは。衰たる心也。

かゝりともしらで、野大式うての使にくたり給ひて。それが家のありしわたりを尋て。ひかきのごといひけん人に。いかであはむ。いつくにかすむらむと。のたまへば。此わたりになん。すみ侍しなど。ともなる人もいひけり。

抄云。後撰集この檜垣か歌の言書には。大式藤原興範と侍り。又禁秘抄にも。帥大式赴任。上古必参内召弓場。給酒肴。次御前給祿。藏人伝祿件祿白掛一領。御衣一襲也。延喜興範友干如此。と侍れは。興範大式なりし事。疑なし。しかれとも此物語には野大式とあり。興範は藤氏なれば。異説侍るにや。猶知者のあきらめをまち侍し。

あはれかゝるさわきに。いかに成にけむ。尋ねてしがなど。のたまひけるほとに。かしらのしろきおうなの水くめるなんまへよりあやしきやうなる家にいりける。ある人有て。これなむ。ひかきのごといひける。いみしうあはれかり給うて。よはすれと。はちてこでなん。いへりける。

抄云。おうな姫とかく。年よりたる女をいふ也。まへよりは。大式のまへより也。あやしきやう成家は。家か何ぞあやしむはかりの賤しき心也。

和名抄。姫。於無奈。

後撰集ぬは玉のわかくろかみはしら川のみつはくむまてなりけるかな

抄云。しら川は。肥後国阿蘇山より出る川也。水色白如粉といへり。みつはくむとは。老かゝまる也。又云。さ右の膝かしらと。おとかひの一所へよるを。みつわさすといふ。云々。

直云。古本今昔物語卷十二。増賀法師の事をいへる条に。美豆左須夜曾知阿末利乃於以乃奈美。久良介乃係弥爾阿布曾字礼志伎。ともあれば。三齒さすともいふ也。老て齒のまはらに落て。上下の齒と三つさし合。くみあふやうに。なりたるをいふならむ。三輪と心得て云は誤也。今昔にも美豆波とこそ書たれ。後撰集三つくしのしら川といふ所に。すみ侍りけるに。大式藤原興範朝臣のまかりわたるついで。水たべんとてうちよみて。こひければ。水をもていで。よみ侍りける。ひかきの姫年ふればわか黒髪もしら川のみつはくむまでおひわけるへし。かしこに名高く。ことこのむ女になん侍りける。

檜垣家集には。老はてゝかしらのかみもとあり。

源氏夕顔云。これみつの父の朝臣のめものにはべしものゝみつはくみてすみ侍る也。云々

とよみたりければ。あはれかりて。きたりけるあこめひとかさねぬきてなんやりける。

抄云。あこめ柏の字也。もしほ草に説に侍り。一説に。舞きぬのやう成物也。うへにうちかくる物を云也。又いはく。公家の装束のしたに。をりたるものゝあやなとのやうにある物を。かさねきるを。あこめといふともあり。此物語のさまをおもふに後の説しかるへきにや。

直云。あこめは鶉にて。桂に同しくて。鶉は束帯の

下にも着れば。身の長とひとしくす。桂はうちゝにも着。又よるの物ともすれは。裾いと長き也。是をもてわかつべし。後世のさうそく抄ともに。此けちめをしりわきまへたるなし。

(同右、三〇五〜三〇七頁)

〔付記〕

本稿に於ける本居宣長の著作からの引用は、すべて筑摩書房版『本居宣長全集』に拠った。また、本稿執筆に際して、古典籍の閲覧並びに拙論への引用を許可してくださった刈谷市立刈谷図書館にお礼申し上げる。

(福井大学准教授)